



南島キリスト教史入門

5月25日発売

奄美・沖縄・宮古・八重山の近代と福音主義信仰の交流と越境

一色 哲著

(いっしき・あき氏は帝京科学大学教授)

◆四六変判・並製・232頁・本体2200円

シリーズ《神学への船出》

久々の通史成る。交流史的な視点からの叙述。

本書で言う「南島」は琉球王国の最大版図とほぼ重なる。この地のキリスト教は、日本のキリスト教に従属しない独自の深さと広がりを持つ。なぜ南島には多くの教会が建てられ、現在でも多くの人の信仰を集めているのか。その歴史を丹念な調査と「交流史」的な視点から重層的に追究した労作。

『福音と世界』好評連載の単行本化。

関連の既刊書

土肥昭夫著

日本プロテスタント・キリスト教史

◆A5判・488頁・本体5000円

問題史的視座から歴史にアプローチし、各時代の様相を浮き彫りにした名著。

【目次より】

はじめに 南島キリスト教の深さと広がり

序章 南島キリスト教史の構造と概要

第1章 南島へのキリスト教「再」伝道と地域社会

第2章 深化と抵抗からみた「民衆キリスト教」の形成

第3章 南島キリスト教の広がりと越境

第4章 南島発祥の「民衆キリスト教」の生成と定着

第5章 南島の軍事化と試練に直面するキリスト教会

カール・バルト著／天野有編訳

教会と国家Ⅲ

東西冷戦の時代 バルト・セレクション6

◆文庫判・並製・587頁・本体1800円

「キリスト者共同体と市民共同体」、「国家秩序の転換の中にあるキリスト教会」など、戦後冷戦期の重要論考11編を精選し、新訳で贈る。特別解説「神に基づく政治」(B・クラッパート)収録。

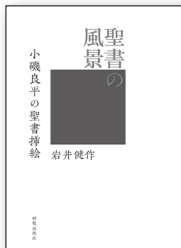
岩井健作著

聖書の風景

小磯良平の聖書挿絵

◆A5判・上製・160頁・本体2500円

日本を代表する洋画家小磯良平(1988年没)が描き下ろした32枚の挿絵を1枚1枚読み解く。画家は聖書から何を読み取ったのか。



●催事のお知らせ

『いのちの水』原画展開催!

5月9日～27日、教文館3階ギャラリー・ステラにて

- イベント1 望月麻生牧師による消しゴム版画ワークショップ (材料費実費 1500円)
5/11 & 12 (金/土) 14:30～15:30 楽しい小物づくりに挑戦しよう! (1回完結)
- イベント2 渡邊さゆり牧師&訳者&画家の愉快なトークイベント
5/11 (金) 18:30～19:30 この寓話の意味を考える。
- イベント3 友野富美子牧師による朗読ワークショップ
5/18 (金) 18:30～19:30 メッセージを自分の声で伝えてみよう!

イベントは要申込
教文館キリスト教書部
Tel: 03-3561-8448
Fax: 03-3563-1288



トム・ハーパー 作／中村吉基 訳／望月麻生 絵

最初は誰もが飲めた泉だったのに……。聖なるものを囲い込もうとする宗教の閉鎖性を痛烈に批判した寓話を、達意の訳文と美しい消しゴム版画で贈る。

◆B6判・56頁・本体1500円

ピンク・ダンデライオン著／中野泰治訳

クエーカー入門

社会的な証しや沈黙の礼拝などで知られるクエーカー運動は、いつどのように生まれ、これからどこに向かうのか。明瞭な社会学の記述で、その歴史・運動・思想を明らかにする。

◆四六判・予価2200円

栗林輝夫著／西原廉太・大宮有博編

アメリカ現代神学の航海図

フェミニスト神学、ウーマニスト神学、アジア系アメリカ神学、ポストモダン神学、ポストリベラル神学、修正神学、プロセス神学等々、複雑かつ活発な運動を絶やさないアメリカ現代神学の鮮やかな見取り図。〔栗林輝夫セレクション〕2。

◆A5判・予価5500円

関口安義著

評伝 矢内原忠雄

新渡戸・内村の薫陶を受け、伝道を志しつつ、経済学者として優れた業績を上げ、軍国日本と対決して野に退き、戦後は東大総長として再建日本の精神的指導に挺身した無教会キリスト者の生涯を、綿密な調査を基に描きあげた1100枚の大作。

◆A5判・予価8000円

●4月に出た本と雑誌

バルト自伝

カール・バルト著／佐藤敏夫編訳



アメリカの雑誌の求めに応じてバルトが10年ごとに綴った3編の自伝的文章を収録。42歳から72歳までの30年間の生活の変化と神学の展開を明らかにした興味尽きない内容。

巻頭には佐藤敏夫氏の優れた長文解説がつく。復刊にあたり読みやすく改版。

◆新書判・本体1200円

福音と世界

◆税込635円

5月号 特集 マルクス主義とキリスト教

——マルクス生誕200年に考える

寄稿者：不破哲三、柄谷行人、武田武長、小田原琳、四戸潤、弥、デヴィッド・ライアン／星野正興、森宣雄、植本一子、福岡伸一、芦名定道、望月麻生、内田樹、辻学、佐藤優、ブレイディみかこ

●刊行目前の一色哲著『南島キリスト教史入門』の校正をしています。『福音と世界』の連載が元になった本ですが、そのころ私はまだ入社していなかったこともあり、新鮮な思いで原稿を読み進めています。同書が提示する、国・地域という明確に境界化された枠組みでは捉えきれない越境的な伝道の歴史は、現在の本土・沖縄の関係を考えるうえで非常に示唆的なものなのです

●著者の没後50年を記念して改版復刊した『バルト自伝』が、毎日新聞4月29日の読書欄で、佐藤優さんによって大きく書評されました。バルトの40代から70代ははじめまでの思想と生活の展開が自身の口を通して生き生きと語られています。なお、新教新書277番とご案内しましたが正しくは279番でした。謹んでお詫びし訂正します。

が、一方で、そこに登場する人びとの生きざまにも驚かされます。とりわけ、上原愛子という人物には強く惹きつけられました。沖縄・読谷村出身の上原は、受洗したことで嫁ぎ先の家から離縁されたものの、東京や長崎の神学校で学んだのち大阪・蒲生教会などで伝道に従事、戦後は沖縄で牧師として働いた人物です。おもしろいのは、その彼女がとった異名「ハジチの伝道者」です。ハジチといえは沖縄などで女性の手に伝統的に彫られていた入墨のことですが、彼女はそれをいっさい隠さず伝道の道をまっ進したというのです。ハジチとキリスト教、まるで相反するようにも思えるふたつの要素をともに身体化した上原は、いったいどんな人物だ

●関西学院大学神学部准教授の榎本てる子さんが4月25日に亡くなりました。かねてより体調を崩し、厳しい闘病生活を送っておられました。榎本さんはトム・ハーパーの寓話「いのちの水」を日本に紹介し、小社が絵本化するにあたって美しい解説文を寄せてくださいました。信仰を徹底して実践的に捉える姿勢は、父の保郎牧師を思わせませんが、その方向や考え方はさらに多様性をもつて展開されていました。まだ55歳でのご逝去は残念でなりません。心より追悼の意を表します。(小林)

福音と世界

2018年
6

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料(送料共) 8460円

特集・労働に希望はあるのか

聖書の労働観と現代 笠原義久

貧者の生み出す富とコンヴィヴィアリティ 渋谷 望

外国人労働者政策の現在 旗手 明

「福祉で働く」ということ 深谷美枝

セックスワーカーの人權を考える 要友紀子

「女からの解放」か「女としての解放」か

野に咲く民衆の神学3 森 宣雄

地のいと低きところにホサナ6 プレイディみかこ

福音の地下水脈8 榎本一子

みことば散歩18 望月麻生

現代神学の冒険21 声名定道

聖書とわたし27 西川美和

新約釈義 第一メモテ書28 辻 学

レイナスの時間論39 内田 樹

佐藤優のことばの履歴書51 佐藤 優

詩篇の思想と信仰154 詩篇148篇 月本昭男